

「小児慢性疾患（内分泌，代謝，血液系）に関する研究」の評価

1) 評価委員

東京慈恵会医科大学名誉教授 国分 義行

小児慢性疾患（内分泌，代謝，血液系）に関する研究班も北川班になって2年，合屋班時代の2年を加えると4年目を迎え，その業績も漸く煮詰まってきたように思われる。すなわち各研究課題について，その研究対象の実態が把握され，それに対する研究方向が確立されるようになってきたというのが今年度の研究結果から評価することができると思う。以下紙数が限られているので，各研究課題毎に簡単に評価してみたいと思う。

1) 代謝性蓄積症の実態と予後に関する研究（分担研究者：北川照男）

本研究はわが国においても比較的古い歴史を有している。それだけに研究態勢はある程度できていたのであるが，本研究組織によりわが国の全国的実態が精細に明らかにされるに到った。その実態により治療方法の検討もされ，実際に応用されることによってすばらしい効果と成績が得られてきているのであるが，それだけに生存者が多くなり，その予後の問題が大きくなってきた。今後この方面からの研究が更に続けられることが望ましい。

2) 代謝異常症の新しいマス・スクリーニング法の開発的研究（分担研究者：森山 豊，成瀬 浩）

従来のTSHあるいは T_4 をラジオイムノアッセイで測定する方法が用いられていたが，そのあい路は否定できなかった。しかしこの研究によって酵素免疫測定法によって代行できることが実証された成績は立派である。そしてさらにこの測定法を応用することによって新しい疾患群のマス・スクリーニングが可能となってくるので，今後の研究によってそれが明らかになることを期待することができる。

3) 先天代謝異常症早期発見例の予後に関する研究—治療指針の見なおし—（研究分担者 多田啓也）

本研究によって先天代謝異常症の早期発見が全国的に可能になった功績は大きい。それだけに治療指針の見なおしが重要になってきた。その点から従来の治療指針の改訂を行なう必要があり，それに向けての研究が特に要望される。

4) 慢性甲状腺機能障害の疫学と予後に関する研究（研究分担者 中島博徳，入江 実）

本疾患がマス・スクリーニングの対象となったのは比較的新しいのであるが，それが間違いでなかったことを証明したこの研究の努力は高く評価されなければならない。今後はその予後をきびしく観察しながらその対策の方法の樹立が期待される。

5)先天性副腎皮質機能障害の治療と予後に関する研究(分担研究者 諏訪城三)

この研究によって本疾患のわが国における実態が把握された功績は大きい。しかし本疾患の予後を考える時安易に本症を処理することはできない。長い予後を追跡することによって治療法が確立されていくことが期待される。

6)若年型糖尿病の生活指導指針(治療指針を含む)に関する研究(分担研究者 日比逸郎)

本研究によって本症の患児 572例がスクリーニングされ、その症例につき精細な調査を行なうことによってわが国における若年型糖尿病患児の実態が明らかにされた意義は大きい。それに即応した生活指導指針の確立が要望されるのであるが、そのための研究が今後更に続けられることは高く評価される。

7)カルシウム代謝異常の実態に関する研究(分担研究者 松田一郎)

わが国において近年小児、特に学童において骨折が多発しているのであるが、この問題のみならずカルシウム代謝に関する研究は緊急である。本研究によってカルシウム代謝異常のクライテリアを確立することは極めて重要であり、高く評価されるべきである。

8)血友病および慢性血小板障害の実態と治療基準の設定に関する研究(分担研究者 福井 弘, 長尾 大)

これまでの研究によってわが国の血友病患者の実態がほぼ正確に把握されてきた。従って今後はこれらの患者の管理のあり方が問題になってくるのであるが、その際最も重要なことは治療基準の設定であろう。それに向っての研究態勢がととのったことは高く評価され、その結果が期待される。

9)口蓋裂による咀嚼障害の歯科矯正治療の研究(分担研究者 三浦不二夫)

口蓋裂は先天性奇形として比較的多くみられる疾患であるが、その言語障害に及ぼす影響は大きい。単に手術療法のみではこの問題は解決されない。そのためには顎の成長、口蓋の癒痕組織の問題、口輪筋等の筋活動の生理等が解明されなければならない。それに向って研究が進められていることは高く評価される。

以上のべたように各研究は行政にとりあげ得る問題を研究しつつ、将来の行政にどのように反映していくべきかというデータを積み重ねてきており、文部省科学研究と異質な極めて貴重な研究がなされていると評価してよい。